

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎



明報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 第0003号
護國青年會議 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成16年9月1日



働哭、再び 昨年同様、涙滂沱として流れる働哭の靖国であった。前日までの猛暑が嘘のような肌寒ささえ感じる冷たい雨の中、靖国の社を歩く老若男女の人の群れ。なかでも10～20代と思われる若者の姿が多く見受けられ、少しずつだが確実に「若者たちの間に愛国心が芽生えてきている」と靖国を参拝した多くの人々が実感したことでしょう。靖国の社に集った若者たちが胸に抱く「日本を愛する心と日本の現状を憂う心」は去年より今年、今年より来年と年を追うごとに高揚し、やがては日本国中に広がっていくことでしょう。「御英霊の皆様、御恩に報いる日はそこまで来ています。もう暫らくお待ち下さい」我々の使命は、この戦争を知らない若者たちに・・・斯く言う私も戦争体験はありませんが・・・正しい歴史を認識させて国民の間に蔓延し

ている自虐的歴史観を払拭することと、圧倒的多数の国民が、衷心から御英霊の皆様に感謝の言葉を申し上げ、謹んで哀悼の誠を捧げる環境を構築することにあると思います。

皇紀2664年8月15日正午、国家繁栄の礎となられた御英霊に謝罪と感謝の意を込めて、哀悼の誠を捧げる同憂の土の背中に働哭の雨が降りそそぐ・・・傘を投げ捨て、頭を垂れる我々の背中に激しく降りつける雨音とともに何処から御英霊の声が聞こえる「祖国をこんな国にするために我らは戦い、傷つき、命を投げ出したのではない。どうか心ある人たちよ、売国政治家どもが支那や朝鮮の圧力に屈し、我らが眠る靖国神社を形骸化し、代替施設を建設しようとしていることを断固阻止して戴きたい。雨の中こんなに多くの若者が参拝に来てくれて本当に嬉しい。どうか憂国の志士たちよ、この若者たちを正しく指導していってくれ。どうか若者たちよ、我らの思いを知って日本の将来をよるしく頼む・・・」まさに御英霊の魂の叫びであった。雨は依然として降り続き靖国の社に働哭がこだまする。
編集人・戸出蒼流

神国日本万歳! 大東亜戦争の敗戦から59年、自分のような戦後30年経ってから生まれた若輩者が当時のことを知るためには資料を検索したり、当時を知る人から話を聞く他にありません。しかし赤い雲に覆われている昨今、左寄りのマスコミや日教組による東京裁判捏造等の自虐史観により、御先祖御英霊の御遺志や国を愛する心を踏みにじる情報が蔓延し、正しい情報を得ることは容易でなくなり、赤い雲を取り払う一条の光を見つけ出すことは困難な状況となっていて、知れば知るほど憂いを持たずにいられません。

先達が築き上げた偉大な歴史、またその歴史を持つ偉大な国に生を受けた喜びや感謝、そしてその思いから為る敬神尊皇の精神が支那や朝鮮による内政干渉と、それに感化された弱腰外交によって侵害されようとしています。

小さな島国でありながら経済大国となり得た我が国の繁栄は、素晴らしい文化と崇高な歴史を築き上げ、大東亜戦争において欧米からのアジアの解放という大儀を持ち、アジア諸国のために戦った御先祖御英霊の尊い犠牲のお蔭であることを忘れてはならないと思います御英霊に対する報恩の証として我々は、緩んだ箍を締め直し、日出ずる国である日本が世界に冠たる国家となるよう精進しなければなりません。

敗戦の日の今日、御英霊に対する謝罪と感謝の念を持って、靖国神社に参拝致しました。様々な理由で参拝できなかった方々もどうか心から御英霊に感謝をし、誓いを新たにして毎日をご過して頂くことを僭越ながら所望致します。「神国日本万歳!」
編集部・吉田源太

吉田松陰- 安政4年(1857年)萩の町に小さな革命が起こりつつあった。町外れに若干28才の政治犯の青年が書を講じ、時勢を論じる小さな塾を開いた。その不思議な魅力が萩の若者の心をとらえていた。

若者の中に久坂玄瑞、山県有朋、伊藤博文の姿があった。彼らの多くは藩校である明倫館に学べない足軽などの下級藩士の子息であった。しかし、高杉晋作のように上士の子息で明倫館の教育に飽き足らず、松陰の門を叩く若者も数多くいたのである。

安政5年(1858年)、阿片戦争に始まる西欧列強の中国侵略は天津攻撃によって本格化した。その牙は今や日本にも迫るかに見えた。そして米総領事ハリスの圧力で、幕府は日米通商条約を結んでしまった。この不平等条約に国論は沸騰し幕府は反対派を弾圧した。この時塾居の身にあつて、門弟の薫陶に専念していた松陰の時局への怒りは再び燃え始めていった。